

南風病院創立70周年記念対談



南風病院 高齢者・健康長寿医療センターから始まる 超高齢社会への挑戦

南風病院「高齢者・健康長寿医療センター」は、令和4年1月のオープン以来、地域の人々の健康長寿延伸に取り組んできました。南風病院は、今年が創立70周年の節目であり、今後、地域包括ケアシステムにおける急性期医療と支援・介護予防の両分野を担う存在として、これまで以上に地域医療への貢献が期待されます。今回、フリーアナウンサーの阪田陽子さんの進行で、同センター長の内野尉義先生と特別アドバイザーの辻哲夫先生に、センターの今後について語り合っていました。



フリーアナウンサー

阪田陽子さん

高齢者・健康長寿医療センター
センター長

内野尉義先生

高齢者・健康長寿医療センター
特別アドバイザー

辻哲夫先生

国内の超高齢化を背景に
医療のあり方が大きく変化

阪田 まず、40年以上にわたって老年医学や認知症学の研究と教育、診療に携わってこられた大内先生が、「高齢者・健康長寿医療センター（以下「センター」）」と関わることになったきっかけは何だったのでしょうか。

大内 南風病院の北野さん（現・理事長）から、高齢者医療専門の部門を作りたいという話があったのがきっかけです。かねがね高齢者のための医療センターは、医療者が患者さんの来院を待つのではなく、医療機関側から地域住民に働きかけられるような仕組みを作らなければいけないと思っていました。

北野さんとは同郷ということで親交もあり、このプロジェクトは非常に重要だと考えてお引き受けしました。

阪田 その取り組みの過程で、元厚生労働省事務次官の辻哲夫先生が特別アドバイザーとして参画されたんですね。
辻 私が厚生労働省の保健局長だった頃、医療保健審議会の委員だった大内先生が「高齢者医療は、精神状況や社会状況までを総合的にアセスメントして、その人の幸せを考えなければならぬ」と仰っていました。

地域に根差した中核病院が、地域住民の健康増進のための事業を展開する。

これが、今後の医療の役割ではないかと思っております。



大内 尉義 先生

昭和48年、東京大学医学部卒業。内科研修の後東京大学第3内科に入局し、循環器病学を専攻。昭和60年米国テネシー大学生理学教室に留学し、高血圧の基礎的研究に従事。翌年帰国後、東京大学老年病学講師。次いで平成7年同教授に就任。老年医学、循環器病学、骨代謝学、認知症学の診療、研究、教育にあたった。平成25年国家公務員共済組合連合会虎の門病院院長を経て、現在同病院顧問。平成17年～27年日本老年医学会理事長。平成19年～25年日本老年学会理事長を務めた。

大内先生

つまり、「CGA(高齢者総合機能評価)」の取り組みですね。大内に感銘を受けて、すぐに診療報酬でCGAの点数が付けられました。その後、お付き合いが深まり、現在のような関係に至ったのです。

大内 これまでの医療は、主に悪くなった臓器にアプローチしてました。しかし高齢者医療には、病気の予防を含め、生活機能を総合的に診る視点が必要なのです。

辻 そうした大内先生の意見を参考に、その後、「後期高齢者医療制度」が施行されることになりました。今や、多くの人が85歳以上まで生きる時代ですが、その人達が要介護状態で施設や病院に押し寄せたら、保険財政は大変です。大内先生が、老年医学会理事長の時に打ち出した「フレイル予防」という概念は、大変画期的なものだったのです。

辻 いったん要介護状態になると、なかなか元には戻りませんが、その手前のフレイルは、元に戻れる可能性があります。しかし、現在の政策では、本格的なフレイル予防に目が届いていません。このあたりをどうするか、非常に大きな課題だと思います。

大内 自分の健康は自分で守る」という視点も必要ですが、その上で、予防医療にも少しは国のお金を使ってほしいですね。辻 そのために、「フレイル予防

心身の衰弱を遅くする対策をより早い段階から実施すべき

阪田 センターの、現在までの取り組みについて聞かせてください。

大内 私が担当している「フレイル」の診療科(老年内科)では、最初に体力測定を行い、その後必要な検査を行い、問診票のチェックリストに記入いただいたてから外来を受診する仕組みを作りました。

運動指導だけではなく、施設内で実際に筋トレをやってもらっています。このように、フレイルに特化した診療の仕組みを作っているところは、国内でもそれほど多くはないと思います。

阪田 辻先生は、フレイル予防の今後について、どのようにお考えですか。

辻 自分自身の健康を自分で守る」という視点も必要ですが、その上で、予防医療にも少しは国のお金を使ってほしいですね。辻 そのために、「フレイル予防

のポピュレーションアプローチ」も重要です。これは地域住民の集団ごと、健康増進や介護予防の啓発を行う手法で、一義的には行政の仕事ですが、専門知識を持つ人材を有している地域中核病院が行政と連携して動けば、地域全体に対して色々な情報を提供できて地域住民も自ら勉強するようになるのではないのでしょうか。

中核病院のノウハウを活かしフレイル予防を意識付け

阪田 「中核病院としての役割」は、今後ますます大きくなるでしょうね。

大内 地域に根差した中核病院が、地域住民の健康増進のための事業を展開する。これが、今後の医療の役割ではないかと思っております。同時に国側も、健康維持活動にインセンティブを付けるとか、健康産業を公益事業化するとか、色々なやり方があると思います。

辻 住民自身が自立度を落とさないように努力するよう行政の支援が必要ですが、一方で、年齢を重ねても心身が弱らないようにしたいというのは、女性が、いつまでも美しくありたいというのと同様の欲求だと私は思っています。そのために

エビデンスが揃った上で新産業に発展する可能性も

阪田 センターではカフェの運営も検討されていますが、それも効果的なインセンティブですね。大内 地域の方々に自由に病院に来ていただいで、お茶を飲みながら色々な方とお喋りしていただく、サロンのようなカフェを考えています。

辻 このカフェに来て皆と一緒に食事し、身体を動かして、友達も増え、良い改善状況のデータが検証できれば、エビデンスに基づいた「フレイル予防産業」として成立します。今後期待されるヘルスケアサービス産業の、モデル開発的な側面があると思いますよ。

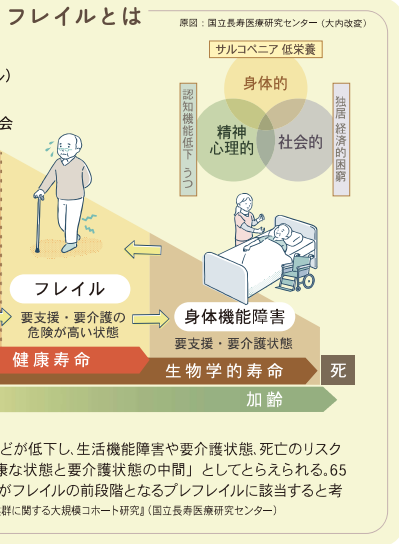
大内 センターの筋トレに参加しておられる方の平均年齢は75歳で、握力や歩行スピードを継続的に測っていますが、参加3ヵ月後あたりから明らかにデータが改善しています。「75歳でも遅くない」ということです。

辻 非常に興味深いですね。きちんとデータが取れば、業界認証事業を起すことが可能になり、より多くの高齢者がそれを享受するようになるでしょう。阪田 では、最後に大内先生、今後の展望についてお聞かせください。



辻 哲夫 先生

昭和46年、東京大学法学部卒業後、厚生省(当時)に入省。老人福祉課長、国民健康保険課長、大臣官房審議官(医療保険、健康政策担当)、官房長、保険局長、厚生労働省事務次官を歴任し、地域包括ケアシステムの構築をはじめとする医療制度改革に尽力した。平成21年東京大学高齢社会総合研究機構教授に就任し、その後特任教授。現在は、同機構客員研究員、医療経済研究、社会保険福祉協会理事長、健康生きがい開発財団理事長などを務める。



【フレイル】加齢によって筋力、認知機能などが低下し、生活機能障害や要介護状態、死亡のリスクが高くなる状態のことで、「健康な状態と要介護状態の間」としてとらえられる。65歳以上のシニアのうち、約5割がフレイルの前段階となるプレフレイルに該当すると考えられる。 ※令和元年『老年症候群に関する大規模コホート研究』(国立長寿医療研究センター)

「高齢者医療は、精神状況や社会状況までを総合的にアセスメントして、その人の幸せを考えなければなりません」

大内先生のその言葉に大いに感銘を受けました。

辻 先生

女性は、化粧品や服にお金を使っているのだから、フレイル予防の取り組みも、堂々とお金をいただくところで発展させることも必要だと考えています。

阪田 確かに化粧品が入っている医療系のアドバンスが、美容系のもので、つい買いたくなるりませぬ。そうしたインセンティブが、高齢の方々のためにあっても良いと思います。

フレイル

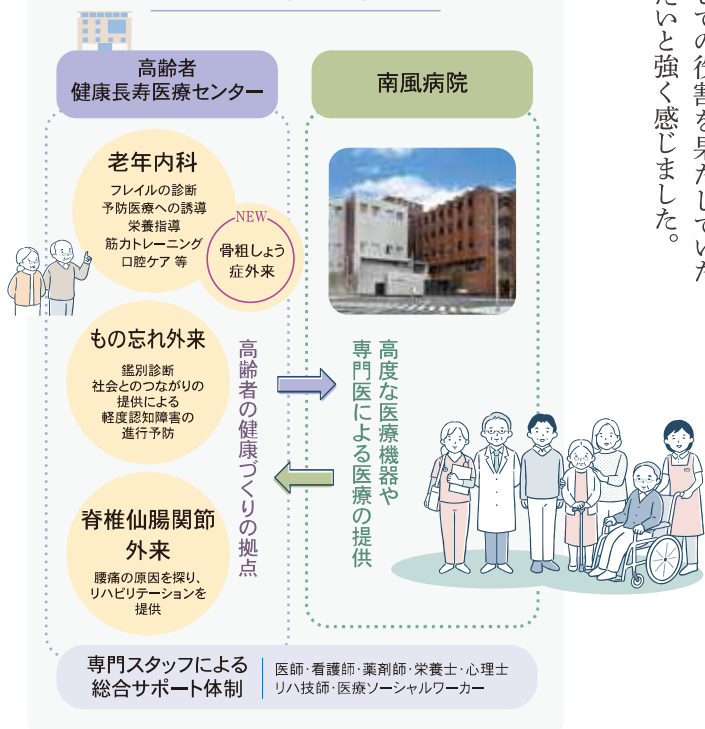
CHECK LIST

- 6ヶ月間で2kg以上の体重減少がある
- 握力低下(男性28kg未満、女性18kg未満)
- ここ2週間、訳もなく疲れた感じがする
- 歩行速度が1m/秒未満
- 定期的に運動・スポーツをしていない

3項目以上☑がつけばフレイル
1~2項目はプレフレイルと診断。



センターの総合力とは?



大内 令和5年8月から令和6年1月まで、「鹿児島市短期集中運動型サービスモデル事業」という市の取り組みにセンターが選定されました。市は来年度も、センターとともに事業を拡大して実施する予定ですが、行政と連携できる色々な事業を、今後展開したいと思っています。

辻先生が東大の高齢者会総合研究機構におられた時から取り組んでおられる「フレイルチェック会」も、ぜひ鹿児島市で開催したいと思っています。

辻 フレイルチェック会は、自分のどこが弱っているのかを、住民自身がチェックする取り組みです。自分たちでチェックして自分たちで学び、「自分ごと化」して頑張れるようにするのです。

大内 センターでは現在、看護師をはじめとするスタッフがトレーナーとして参加者たちをアシストしています。そうした人材をさらに育成していくことが、もう一つの課題だと思っています。また、「ロコモ」も大切です。最近では近隣の病院の先生方が、ご自分の患者さんがロコモでセンターのことを知り、行ってみたいと言われているから...と、紹介いただくことが増えてきました。

阪田 素晴らしいですね。私自身、母が80歳代後半なので、今後、どうなるのだろうかという不安がありました。子供世代から親に、フレイル予防をロコモで推薦できるような、その中核としての役割を果たしていたりたいと強く感じました。

フリーアナウンサー

阪田陽子 さん

元NHK-BSニュースキャスター。人間科学修士・認定心理士。コミュニケーションを専門に行動分析学をベースにしたビジネスコーチとしても活躍。対象は経営者・企業幹部の他、国家機関や医療組織など。公益財団法人大原記念労働科学研修所 協力研究職員。



INFORMATION

南風病院 高齢者・健康長寿医療センター

【診察日】

月～金

休診日 / 土・日・祝日・年末年始

【診療科】

老年内科 (ロコモ・フレイル・生活習慣病・骨粗しょう症外来)

脳神経外科 (もの忘れ外来・頭痛外来)

整形外科 (脊椎仙腸関節外来)

【電話番号】

代表：099-226-9111 予約電話：099-805-2259

【住所】

〒892-0852

鹿児島県鹿児島市下竜尾町6番18号

公式ホームページ



センターまでの
所要時間

JR >>>> 鹿児島中央駅下車 / 車約15分

鹿児島駅下車 / 車3分・徒歩10分

市電 >>>> 桜島棧橋通り電停下車 / 徒歩 5分

市バス >>> 11番線(下竜尾町バス停下車)

桜島棧橋 >> 車3分・徒歩15分

公式マスコットキャラクター

みなミン

